

幸福と人間の本質 (完)

——ベンタムの幸福の概念について(II)——

岸 畑 豊

四

アダム・スミスによつて、當時先に述べられた程度にまで明かに資本家と労働者との否定的關係が指摘されてゐたにも拘らず、尙アダム・スミス自身、及びベンタムがこの點を重要視してゐないやうに思はれるのは、何故であらうか。その一つの理由は、「文明にして繁榮してゐる民族の間では……しかし社會の全體の生産物が非常に多いので、總ての人々が屢々豊富に供給を受けており、最も下級で貧しい労働者でさへも、儉約して勤勉であれば、野蠻人にとつて得ることが出来るよりも生活必需品と便益品とをより多く分前として受けとることが出来る」(ibid. p. 1 viii)といふ當時の一般的な考へ方にあつたのであらう。もつとも野蠻人の状態と比較することが労働者の生活の貧富の判定の正當な根據でありうるかどうかは疑ひなきをえないけれども、社會の繁榮についての確信が彼等をして樂天的ならしめたのであらう。しかしながら資本家と労働者との間に對立よりもむしろ尙利害の共通を感じさせた理由は、當時兩者が共通の敵を持つてゐたことにあつたと思はれる。共通の敵とはいふまでもなく産業資本主義體制の發展を阻止する、特權に支へられた支配階級であつた。なる程彼等は既に腐敗してゐたであらうし、もはや社會を指導する正當な根據を失つてゐたであらう。しかしベンタムの時代には彼等は無視してよい程無力ではなく、むしろ尙有力でさへ

あつた。これら少數の特権階級とペンナム達が代表する階級の多數者との關係はどのやうなものであつたのであらうか。この點についてペンナム自身の言葉によつて考察しよう。ペンナムは當時のイギリスの社會を二つの階級に分ち、これを「支配する少數者」the ruling few、及び「臣従する多數者」the subject-many (Benham: Works vol. ii, p. 455) と名づけてゐる。そして更に兩階級の狀態について次のやうに述べてゐる。「腐敗と不腐敗とに關して、或ひはもつと明瞭にいへば、惡徳と美徳に關して明白な實際の真相はどのやうなものであるか。それは次の通りである。支配する少數者に最大の惡徳と腐敗がある。何故ならば普遍的な利益を犠牲とする彼等自身の私的で惡質な利益に奉仕する權力が彼等の手中にあつたからであり、又そのやうに振舞ひ、そのやうな不斷の目的達成のために相互に手段となり合ふことを企て、これを實行することによつて、彼等は惡徳と腐敗との傳播者であつたからである。これに對して臣従する多數者には殆んど惡徳と腐敗とはなかつた。何故ならば彼等はそれ程著しくそのやうな惡質な利益の干與者ではなかつたからであり、或ひは又彼等の行爲に普遍的で有益な方向を與へることに個人的利益を見出す人々によつて、或ひは彼等の國土や人類を愛し、その心情が嘗つて何等かの自愛的な利益によつて壓倒されたことのないやうな人々によつて指示されるやうな進路を追求する自由が残されてゐるからである」(ibid)。この言葉の中にペンナムが明瞭に語つてゐるやうに、支配者の惡徳と腐敗の原因が彼等の關心の利己的であることと共に、「彼等自身の私的で惡質な利益に奉仕する權力が彼等の手中にあつた」ことに見出されてゐる點が注目されねばならぬ。これに對して臣従する多數者に惡徳と腐敗が少ないのは、その反對に彼等が惡質な利益の干與者でなかつたこと、即ち彼等の關心が利己的でなかつたことと、權力に與らなかつたこと、従つて普遍的な利益を主張する人々の正當な指示に自己の進む方向を見出す自由を持つてゐたこと等が原因として擧げられてゐるのも興味深い。少數者に權力が集中して、彼等が特権階級となつたとき、彼等は文字通り「支配する少數者」となり、これに對して多數者は「臣従する多數者」となる。支配者と隷屬者といふ否定的人間關係がこゝに見出されるのであるが、この關係を生んだ原因はいふまでもなく

生産手段の所有とこれに結びつく特權とであつた。このやうな否定的關係に於いては支配者の關心が利己的となるのが一般的傾向であるし、當時のイギリスに於いても決して例外ではなかつた。當然の結果として彼等は腐敗せざるをえなかつた。その著しい例として、國家權力を背景としたマーカンタイル・システムに便乘して爲された特權階級の商業、産業上の利益の獨占が擧げられるだらう。これが如何に國民の多數を犠牲とし、社會に毒害を流し、社會全般の繁榮を阻止したかは「國富論」の重商主義批判の部分に詳しく述べられてゐる通りであらう。經濟上の利益の獨占は多數者にとつて不公平で苛酷な悪法の制定を要し、このやうな立法には悪名高い腐敗選舉區と制限された選舉制度が維持された。これはその一例であるが、權力の座にあるものの悪徳と腐敗は、これらの事柄を可能にするやうな社會的條件の下に於いては例外的な事柄といふよりはむしろ一般的傾向といふべきではないだらうか。だからこそベントナムも「政府の實際上の目的 the actual end はどの國家に於いても、一人であれ、多數であれ、政府の權力を行使する人々の最大幸福である」(Benham: Works, vol ix, p. 5)と言はざるをえなかつた。このやうな支配者の利己的關心の對象となつた「臣従する多數者」は、彼等の本質的な活動と、その活動に伴ふ正當な利益から疎外されて、彼等にとつて本質的なもの他者、即ち望ましくない状態におかれたのであつた。こゝに多數者の不幸と不満とがある。問題の核心は多數者の本質的活動と、これに伴ふ正當な本質的利益が阻害されてゐる點にあつた。従つて多數者の不幸と不満とは彼等にとつて本質的に重要な問題であつた。このやうな多數者の不幸と不満とから生ずる彼等の本質的な要求は、次のやうなベントナムの言葉を通して表明せられるであらう。「いづれの國家に於いても、政府の正當な本來の目的は國家を構成する總ての個人の最大幸福、換言すれば最大多數の最大幸福である」(Ibid)と。支配する少數者は政府の實際上の目的に固執し、多數者は政府の正當な本來の目的を要求する。少數者は現状を維持しようとし、多數者は現状を改革しようとする。當時尙少數者の幸福が目的とされた。これは多數者の不幸、又は幸福の制限を意味するが故に、多數者は自己の本質的活動とこれに伴ふことを期待する幸福を正當とし、これを要求したのである。

特權階級との對立關係に於いて、ベンタムは明かに「臣従する多數者」の立場に立つてその利益を防衛し、その要求と確信とを先の命題によつて表明したわけである。多數者とベンタムとのこのやうな關係をジョン・ステュアート・ミルは次のやうに述べてゐる。「我々の社會制度に關して今までに爲されてきた諸變化、及び今後爲されるであらう偉大な諸變化は哲學者の事業ではなくて、最近有力なものとなつてきた社會の大部分の人人の關心と本能との事業である。しかしベンタムはそれらの關心と本能とに聲を與へたのである。彼が語り出すまでは、我々の社會制度が自分たちにとつて不適當であることを知つてゐたそれらの人々も、敢てこのことを言ひえなかつたし、又意識して考へることを敢てしなかつたのである」(J. S. Mill: *On Bentham*, p. 41) と。そしてこの點をアレヴィは一層具體的に、しかもはつきりと次のやうに指摘してゐる。「それ〔ベンタムとジェイムス・ミルの道德〕は社會に通用してゐる反感又は共感を實踐的判斷の感情的な法則としたり、行はれることの稀で虚飾的な美德を讚美したり、又は支配階級の利益といふ見地から大衆に謙讓と犠牲とをすゝめたりするやうな宗教的、又は貴族的な、そして禁欲的、又は騎士的な道德ではない。それは勞働する職人や、鋭敏な商人のために創り出され、これらの人々に彼等の利益を防衛することを教へる平民的といふよりはむしろブルジョア道德であり、推論し計算する平凡な道德である」(E. Halevy: *Growth of philosophic radicalism*, p. 477~478) と。多數者の利益を特權階級から防衛することがベンタムの道德の眼目であつたとするこの解釋は、更に有力な根據をベンタムの著「僞瞞論」*Book of fallacies*の中に見出すことが出来る。「僞瞞」*fallacy*とは何であるか。ベンタムはこの著作では特に政治上の僞瞞に限つてゐるのであるが、これを次のやうに説明してゐる。「僞瞞とは特にある意見、又は假定せられた意見を列擧するある命題に對して適用せられる名稱ではなくして、どのやうな形のものであれ、意圖の有無をとはず、何等かの誤つた意見を信奉せしめるか、又は既に認められてある誤つた意見を介して何等かの有害な方向に向ふ行動に従事せしめ、又はこれを固守せしめるやうな傾向をもつと思はれる論議に對して適用される名稱である」(*Bentham: Works*, vol. II, p. 380) と。即ち僞瞞といふ

のは單純な意見の誤謬 error ではなくて、誤つた意見を悪用して、有害な結果を導き出さうとする悪質な關心に基いてゐることに注意せねばならない。僞瞞は誰によつて、又何のために用ひられるのであるか。「この僞瞞はあらゆる道理の働きの抑壓する意圖をもつて悪弊、又は人民大衆の全體にとつて有害な制度を支持することに關心をいだいてゐる人々によつて、あらゆる種類にわたつて非常に多く利用されることは明白な事柄である」(ibid. p. 383)。このやうな悪質な關心をいだいてゐる人々とは誰であつたか。いふまでもなくそれは「支配する少數者」であつた。少數者は悪弊を維持することに於いて利益を共にし、有害なる制度の支持を通して聯合する。そしてあらゆる手段を盡してその利益を守らうとするだらう。「しかも唯僞瞞によつてのみ防衛しようといふのが悪弊の一つの特色である。従つて悪弊によつて結合した總ての徒黨にとつて僞瞞、それも各個人にとつて役立つやうなものばかりでなく、徒黨全體にとつて有用な諸々の僞瞞を最も廣範圍に適用することがその關心である。そこで彼等にとつて、人間精神をして誤謬と眞理との區別が出来ないやうな暗愚な状態にとめておくことが最も重要な事柄である」(ibid. p. 470)。従つて先に引用したアレヴィの「支配階級の利益といふ見地から大衆に謙讓と犠牲とをすゝめるやうな宗教的、又は貴族的な、そして禁欲的、又は騎士道的道德」といふ言葉が決して誇張でないことは明かであらう。ベンタムは「僞論論」では専ら政治に用ひられるものだけに限つて詳細な分析を行つてゐるのであるが、僞瞞は單に政治上ばかりでなく、「あらゆる種類にわたつて非常に多く利用されることは明白な事柄である」から、道德の領域に於いても用ひられることはいふまでもあるまい。少數者にとつて「人間精神をして誤謬と眞理との區別が出来ないやうな暗愚な状態にとめておくことが最も重要な事柄」だとすれば、逆に彼等にとつて最も恐るべき、しかも望ましくない事柄は、多數者が誤謬と眞理とを區別して、僞瞞を看破り、眞に自己の本質的な利益に自覺め、團結して強大な勢力となることである。多數者の立場に立つ功利主義者の爲すべき最も重要な事柄の一つはこの點にあらねばならぬ。多數者に眞實の利益と幸福との何たるかを教へ、彼等の正常な要求に形を與へ、彼等の力を伸ばす諸施策の原理となつたのがベンタ

ムの功利主義の原理であつた。このやうな功利主義者の努力について、アレヴィは次のやうに述べてゐる。「個人の利益と共同の利益とを調和させようとする功利主義者の試みは、彼等の哲學の中に先づ第一に自己放棄 *self-abnegation* を信用しないで、エゴイズムを確立しようとする試みが存在することを認めないならば理解されることが出来ないだらう」(E. Halévy: *Growth of philosophic radicalism*. p. 474) 云々。次に一つのパラドックスが指摘されてゐる。即ち多數者の利益を防衛し、確保しようとする功利主義者が自己放棄、即ち自己犠牲を否認し、エゴイズムを確立しようとするのに對して、少數者の惡質な利益を維持しようとする支配者が自己犠牲と謙讓の美德を説くといふのがそれである。このやうなパラドックスこそ依存關係が一方的で否定的な人間關係の一つの重要な徴候である。美德を説く支配者に對抗すべき功利主義の倫理とはどのやうなものであるべきかは、多數者にとつて當然知られねばならない重要な事柄であらう。

ベンタムの前提した人間の實在的本質が示すやうに、この人間の本質的活動も、この活動の追求する價值としての幸福そのものも共に現實の社會生活の中に見出さるべきものであつたとすれば、本來人間の本質的活動と、その目指す價值に關はる倫理は、他の部門と並んで、各々現實の社會生活の一領域に對應するものである筈である。ベンタムによれば、「一般的にいって倫理とは、その關心が問題である當事者にとつて、可能な限りの最大量の幸福を産出するために人々の行動を指導する術 *the art of directing men's actions* と定義されるだらう」(Benham: *Principles of n. & l. p. 310*)。倫理は更に「人間の自己自身の行動を指導する術」(ibid)としての「自治の術、即ち個人的倫理」(ibid)と、「他人の行動を指導する術」(ibid)としての「統治の術」(ibid. p. 311)である「立法」と「行政」(ibid)とに分類され、兩者は目的も關與する事柄も同じであつて、唯關與の仕方が異なるのである。狹義の倫理の眼目は、一般に政治が關與しえない領域で、これと協働して共同の目的を達成することにある。ところで一般大衆にとつて最も身近で重要な問題は、直接に何を爲すべきかを指示する義務の内容である。それはどのやうなものであるか。「道徳と

立法の原理」の中でベンタムは次の三つの義務を擧げてゐる。義務を大別すれば、「人間の自己自身への義務」と「他人への義務」とになるのであるが、前者には「思慮」prudence (ibid) が、後者には「誠實」probity と「慈善」benevolence (ibid) が各々義務として屬する。各々の義務はいづれも自己自身、又は他人の幸福の實現の依存する人間の「態度」behaviours (ibid) であつて、自己自身の幸福の實現にとつて「思慮」が重要であることは今までの考察から一應説明を要しないと思はれるのであるが、「誠實」と「慈善」とは、その内容がベンタムに相應しく、興味深い。兩者はいづれも他人の幸福を考慮するに方つてとるべき態度であるが、「他人の幸福を減少させることを慎む方法」(ibid) によるのが「誠實」であり、「他人の幸福を増大することを工夫する方法」(ibid) によるのが「慈善」であると説明されてゐる。従つて三つの義務は皆自他の幸福を實現するといふ唯一最高の目的に奉仕するといふ意味に於いて義務であるのであつて、各々がそれ自體で價值あるが故に義務なのではない。ベンタムが「倫理とは、その關心が問題である當事者にとつて、可能な限りの最大量の幸福の産出のために人々の行動を指導する術」と定義したとき、彼は倫理の最高の目的を明示するとともに、この目的を「産出するために人々の行動を指導する術」としての倫理がこの目的に奉仕すべきものであることをも示してゐるといつてよいだらう。倫理の指導する事柄の中最も重要なものが義務内容であるとするならば、義務の最高目的に對する關係は、目的實現への奉仕、又は手段といふべきではないだらうか。今の場合、「美德はある目的への手段と考へられる。ある目的への手段は目的が價值づけられる限りに於いて價值づけられる」(D. Hume: 'Treatise of Human nature' p. 310) といふヒュームの言葉は、美德についてはあるが興味深い。一般に倫理的なものが、「最大多數の最大幸福」といふ命題に示されるやうな唯一最高の目的に對して奉仕すべき手段と考へる點で功利主義者は大體一致してゐるやうであつて、ベンタムの場合も例外ではない。そしてこの點が今注目されねばならないのである。ベンタムに於いても義務が義務として意識され、價值あるものとして服従される場合、常にその奉仕すべき目的が眞に價值あるものとして正しく把握されてゐることが肝要な

事柄でなければならぬ。もしこの把握が缺けており、目的が見失はれた場合には僞善のつけ入る隙も生れるからである。「最大多数の最大幸福」といふ命題は、この最高の目的を指示するものとして、倫理に於いても一刻も忘れられてはならない。勿論ベンタムの倫理の眼目はこの命題の指示するところを積極的に實現することにあるのはいふまでもないが、階級対立が現に存在する社會に於いて、多數者に向ふべき最高目的を指示し、これに到る手段としての義務を、この目的との關聯に於いて示した彼の倫理の意味も亦注目されねばならない。アレヴィがベンタムの道德を「勞働する職人や鋭敏な商人のために創り出され、これらの人々に彼等の利益を教へる平民的といふよりはむしろブルジョア道德」であると評したことは決して誇張ではなく、正當なものであつたといふべきであらう。従つてこのやうな道德の最高目的の表現である「最大多数の最多幸福」といふ命題は、當時尙存在した支配と隷屬といふ否定的人間關係に於いては、最大多数者の本質的利益としての幸福の防衛といふ點で極めて重要な意味と役割とをもつてゐたといふことが出来る。

ベンタムの幸福の概念そのものが一定の社會的條件と、これに對應した人間關係を不可缺の前提としてゐるから、人間の社會的關係は幸福の概念そのものにとつて本質的な意味をもつことは容易に考へられよう。この點に注目して、人間の社會的關係からベンタムの幸福の概念の社會的意味を探るのが本節の目指すところであつたのであるが、以上の考察によつて、當時の歴史的轉換期の複雑な社會情勢を反映して、彼の幸福の概念は、これに對應する産業階級といふ現實の最大多数者の建設的發展と防衛的改革との二つの相互に關聯した意味に於いて、その本質的利益を表明したものとといふことが出来る。先にベンタムの幸福の概念は、その内容そのものからいつて社會的概念と規定されたのであつたが、人間の社會的關係からみて、一層具體的な意味で社會的概念であるといはねばならない。

(註) 關心の對象といふ人間の規定からベンタムの前提した基本的人間關係を探り出さうとしたのであるが、この點に關して起るであらうと思はれる異論について最後に觸れておきたい。それは自愛の關心の對象といふ規定から導き出されたやうな人間關

係が決して人間にとつて基本的なものでなく、何等かの普遍的な人間の本質に基く原理に支配される關係が基本的な人間關係ではないかといふことであらうと思はれる。先に幸福に關する異論の檢討に際して指摘されたやうに、こゝでもベンタムの功利主義が社會理論であること、そして近代社會の普遍必然的社會關係である經濟、法律、政治、道德等に關する理論であることが想起されねばならない。勿論美しい利他的原理の支配する人間關係が数多く存在することは否定出来ぬ事實であらう。しかしながら功利性の原理に基かぬ人間關係の及ぶ範圍はどうであらうか。果して社會全般に現實に及ぶことを期待しうるであらうか。到底期待しえないこと、否むしる廣く及ばぬ方が人類の維持に必要でさへあることをベンタムが斷言してゐたことは既にみた通りである。社會理論として探求すべき人間關係は、社會に生活する限り何人といへども原則的に参加せざるをえないやうな普遍的な關係でなければならぬ。ベンタムの前提した人間の本質規定から導き出される人間關係は當然この意味で基本的でなければならぬ。成程この關係は抽象的であり一面的であらう。しかし、抽象的一面的であるのが近代國家によつて代表される社會の特色といふべきである。従つて小範圍での利他的な原理に基く人間關係がどれ程多く存在しようとも、ベンタムの基本的人間關係とは矛盾しないし、この基本的關係が近代社會の成員である人間にとつて實在的で、しかも本質的な關係であるといふ重要な意味はこのやうな利他的原理の存在によつて何等傷けられないといふ點が注意されねばならない。

五

この小論の眼目は、ベンタムの幸福の概念の具體的内容と社會的意味とを明かにすることによつて、その妥當性を檢討することであつたのであるが、今までの考察では主として彼の生きた時代、即ちイギリスに於いて産業革命が進行してゐた時代との對應に於いてなされたのであつた。それといふのも、彼の幸福の概念が社會的概念であり、現實の社會生活との對應に於いてのみ妥當性が検討されねばならないからである。しかしこのやうな事情はベンタムの幸福の概念が尙我々にとつて問題とならねばならぬことを示してゐるやうである。何故ならばベンタムの没後既に一世紀以上の年月が過ぎており、尙世界の可成りの部分は社會體制上基本的には資本主義體制を維持してゐるにも拘らず、ベンタムの時代と比較すれば著しく發展し、變質しており、基本的な利益の對立と矛盾を露呈してゐることが否

定しえない事實であるとするれば、本來社會的概念であるベントムの幸福の概念——及びこれを目的とする功利主義そのもの——は、當時とは違つた社會的状況下にある我々にとつて當然再検討を要する筈だからである。最後にこの點について問題となるべき點だけを極く簡単に指摘しておきたいと思ふ。

我々にとつて問題となるべき事柄は、今までに明かにされたやうなベントムの幸福の概念が我々にとつて尙妥當するかどうかといふ點であつた。この點を検討するに方つて、問題を二つに分けるのが適當であらう。即ち先の註で指摘されたやうに、彼の功利主義を構成する原理的部分——ホブズからベントムに到る傳統的な功利主義の原理——とこれを具體的に支へる社會的な力とがこれである。先づ原理的部分であるが、この點の検討は先に述べられた人間の實在的本質と、この本質に基く基本的人間關係が我々にとつて尙妥當するかといふ點に向けられねばならぬだらう。幸福の概念はこの二つのものに對應した本質的な價值であり、對象であつたからである。人間の實在的本質は一般的にいつて人間をとりまく環境に對應するものである。ベントムの前提した實在的本質を簡単に自愛的と規定するならば、このやうな性格は人間をとりまく社會的環境が人間を充分に満足せしめる程に豊富且つ完全とならないかぎり變化せず持續するものと考ふべきであらう。我々の社會環境が豊富と完全とからあまりにも遠いのが現状である以上、ベントムの前提した實在的本質は我々にとつても前提されねばならない。本質上自愛的な個人が尙基本的に矛盾なく社會生活を営みうる根據が生産の分業と交換の廣範な支配に基く基本的人間關係であつた。資本主義の發展は分業を一層高度にし、従つて交換の支配を益々強力にすることはあつても、これに代るべきメカニズムを創り出すことが想像出來ないとすれば、ベントムの前提した基本的人間關係も亦我々にとつて前提されねばならないだらう。従つてこのやうな實在的本質にとつて必然的の追求の對象であり、基本的人間關係に支へられた社會的概念であるかぎりでのベントムの幸福の概念は、本質的な價值として尙我々に妥當するといへるのではないだらうか。それ故功利主義も亦原理上我々の社會生活を規制する有力な原理であるといふことも出來るであらう。しかしこの點は尙充分な研究と検討

を要する重大な問題であつて、將來の課題として保留されねばならない。

次に功利主義の原理を支へる社會的な力についてであるが、ベンタムの場合「最大多數」を構成する當時の産業階級は特權階級から自己の基本的利益を防衛することゝ、新しい社會體制を建設することによつて共通の基本的利益を積極的に發展させることとの二つの點で、一つの共通の利益によつて結ばれた「最大多數」であることが出来る。確信されてゐた。この二つの意味で當時の産業階級を「最大多數」と考へたベンタムは、その當時の時代との對應からいつて必ずしも誤つてゐたとはいへないだらう。しかしその後の歴史的推移の事實はベンタムが一つの共通の利益を確信した「最大多數」間に基本的利益の對立が現れ、普遍的な矛盾となりゆくことを示してゐる。當時でも勿論このやうな不吉な事態の豫感がなかつたわけではないが、特權階級との對立といふ比重が尙大であつたために充分認められることがなかつたのはむしろ當然といはねばなるまい。しかし「最大多數」が共通の利益によつて結ばれないで、利害が基本的に對立し、相互に分裂することは、ベンタムの幸福の概念にとつて不可缺の重大な前提條件の崩壊であり、このやうな事態に直面してゐる我々にとつて産業階級が「最大多數」を構成するといふベンタムの前提はもはや妥當しないといはねばならない。もしベンタムの意味内容のまゝで「最大多數の最大幸福」といふ命題を我々の社會の原理として適用するとすれば、現在の被支配的で隷屬的な階級の本質的な不幸と苦惱とを蔽ひかくす許すべからざる僞瞞となるであらう。このやうな僞瞞こそベンタム自身暴露し、その不正と戰つた當のものであつたからである。しかし「最大多數」がベンタムの意味内容に於いてはもはや我々に妥當しないといふことは、當時の状況下で妥當であつた彼の幸福の概念の價値と意味とをいささかも傷けるものではない。「個人に關していへば、元來各人はその時代の子であり、哲學も同様思想に於いて把握せられたその時代である」(Hegel: Rechtsphilosophie, S. 15)といふ意味でベンタムも亦評價さるべきであり、特に現實在との對應を本質的な態度とする功利主義者として彼がこのやうに評價されるのは當然であり、その價値を減するものでないことは注意されてよいだらう。

ベントムの幸福の概念の社會的な意味が我々からすれば既に過去になつた歴史的狀況との對應に於いてのみ正當に評價さるべきだとすれば、ベントムの功利主義思想はその具體的な内容の上では一應我々にとつて既に過去のものとなつてしまつてゐるといふことも出来るわけである。それでは彼の思想内容をして過去のものたらしめ、もはや現在の我々に妥當せしめないやうに發展し、變質した現在の社會的狀況そのものは如何に評價さるべきであらうか。端的に結論をいふならば、ベントムの幸福の概念にとつて缺くべからざる現實的條件である産業階級間の利益の調和が失はれ、これに基本的對立が代ることによつて資本主義社會自體が本質的な點で自己矛盾を暴露したのであると。何故であるか。ベントムが前提したやうな人間の實在的本質と基本的人間關係とが尙前提せられる限り、社會そのものにとつて本質的な事柄は個人の幸福の共存としての社會全般の幸福を可能にする社會關係をあらゆる方策を盡して維持することではなければならぬ。この點にこそ社會の最大の功利性があり、この功利性が社會の眼目であつて、社會の正當性の根據も亦この點にあるからである。「最大多數の最大幸福」といふ命題はこの意味で本質的な點に關して社會のあるべき状態を示してゐるといふことが出来る。これに反して基本的利益の對立が現れることは支配と隸屬の關係を生み、隸屬する人々——社會の大多數の人々——が本質的活動を阻害されて本質的價値を失ひ、實在的本質そのものから疎外されることを意味した。このやうな状態は多くの人々を不幸に陥れる否定的人間關係であるが故に、社會としては本質的にあるべからざる状態、即ち功利性の喪失であり、その自己矛盾の暴露といはねばならない。このやうな否定的人間關係を生み出したものは、利己的に振舞ふ個人の道徳的資性や、人間の一般的な利己的傾向に求むべきではなく、むしろ利己的活動を許す社會的條件に求むべきだからである。そこで我々は次のやうにいふべきであらう。資本主義社會に於いて「最大多數の最大幸福」が最高の原理として支配しうるであらうといふ確信と見通しとを持つた點でベントムは誤つてゐたのであるが、同時に彼の見通したやうにゆかなかつたことによつて資本主義社會は自己矛盾を暴露したのであると。このやうな社會の自己矛盾は我々にとつて否定的運命ともいふべきものであら

う。何故ならばこのやうな矛盾も人間の實在の本質の否定的發現に外ならないのであるが、しかも客觀的な社會條件に制約されて、人間の本质そのものの疎外へと否定的に作用するものだからである。

現代の社會的状況の客觀的で正當な評價といふことは現代に生きる我々にとつて必要缺くべからざる事柄でありながら、同時に又至難の業でもある。ベントムの功利主義の立場に立つかぎりその評價は以上のやうに否定的とならざるをえないであらう。もしそうだとすれば、このやうな否定的状況に對して如何に對處すべきであるか。同じくベントムの立場から豫想される一つの方向を指摘しておく。現代の状況が否定的であると判断される根據で最も重要なものは、ベントムの立場からすれば否定的人間關係に基く多數の人間の幸福からの疎外、即ち不幸と苦惱である。従つて目指すべき目標は現在不幸である人々をも含めて社會全般の幸福、即ち「最大多數の最大幸福」——ベントムとは異つて、現代に對應した意味内容をもつたものとして——でなければならぬであらう。この目的に對應する具體的な方策は現實に存在する否定的人間關係を肯定的なものに轉換せしめて、社會の機能がこの最高目的に對する功利性をもつやうにすることでなければならぬ。このことはしかし實際には容易ならぬ社會改革を意味してゐる。ベントムが當時の否定的な社會状況に對してとつた態度がまさにこのやうな態度であつた。これは先に防衛的改革的と規定せられたのであるが、社會の状況が否定的である限り、ベントムの功利主義にとつては基本的な態度であり、正當な社會の要求として實踐的必然性をもつて將來への進むべき方向を示すものである。

我々が基本的にいづく最高目的も、又そのために目指す社會の改革も實際に實現されねばならない事柄である。この最高目的も、又改革も共に現實に本質を疎外せられた人々に對應してゐるものだからである。そこで我々にとつて重要な問題はこの目的を實現するために現實に改革を推進しうる社會的な力の實體を探ることであらう。社會に基本的な利益の對立が存在する限り、このやうな力は人間的にいつて最大多數を構成する一つの階級によつて代表されるであらうが、その實體が何であるか、又最高目的の實現のために不可缺の條件である「最大多數」

間の利益の調和の客観的根據は何であるか等々が充分に検討されねばならない。これらの點がもし明かにせられえたとすれば、「最大多數」が具體的に何であり、「最大幸福」の具體的内容がどのやうなものであるかも明かになるであらう。この場合にはベントムとは異つた具體的内容をもつて、しかもベントムの功利主義の立場を受け續ぎながら、「最大多數の最大幸福」といふ命題が我々の目的となることが出来るのである。もとよりこのやうな探求は恐らく非常に困難なものであらう。しかしベントムの功利主義の立場が本質的に要求するのはまさにこの事柄なのである。そこで我々は次のやうにいふことが出来るのではないだらうか。ベントムの功利主義——ホッブスの傳統に立つものとして——は現實的な社會理論であるために、現實の歴史的社會的状況に對應すべきものであり、彼の理論の具體的内容は當時の時代に對應するものとして歴史的に制約せられ、このやうなものとしてのみ正當に評價されるものであつた。従つて永遠に妥當するものではなくて、特定の時代にのみ妥當する。しかしながら功利主義の前提——人間の實在の本質と基本的人間關係——が存在する限り、功利主義は如何なる時代に於いても人間の實在の本質の社會的な肯定を意味する「最大多數の最大幸福」を常に最高の目的とし、これを實現するための條件や根據や方策を誠實に探求することを要求するであらう。こゝに功利主義の精神とでもいふべきものがあるといつてよいのではないだらうか。それ故我々がベントムの思想の具體的内容に關して、既に我々の時代に妥當せず、我々にとつて過去となつてしまつた彼の時代にのみ妥當すると斷定することは決して彼を過去の中に葬ることを意味しない。むしろこのやうに我々が斷定する場合、彼が彼の時代に對して功利主義の立場に誠實であつたやうに、我々は我々の時代に對して同じ立場に基いて誠實であることを彼の功利主義の精神から要求されてあるといつてよいのではないだらうか。この意味に於いてベントムは尙我々の中に生きてあるといふべきであらう。(一九五五・一〇・二五)

(完)

(筆者 大阪大學文學部「倫理學」助教)

happen in South and S. W. Asia, and the thus originated idea of contraposition was then introduced to the higher religions, which have given it ethical modifications.

“ ‘ Happiness and Human Nature ’ — On Bentham’s Idea of Happiness II

By Yutaka Kishihata

This paper discusses the problem reserved in my preceding study on ‘ Happiness and an Existence of Man ’, that is, the problem of necessity contained in Bentham’s idea of happiness. For it is one of the three points the clarification of which is required for proving the adequacy of the idea ; and this has been my fundamental question from the beginning of my preceding study. But prior to the consideration of the problem we have to begin what nature of man is presupposed by Bentham. According to Bentham, the real nature of man as an individual is an interested and passionate natural being characterized by self-regard, and to such beings the fundamental social relation is their mutual dependence mediated by the social mechanism of division of labour and exchange. In this respect man must simultaneously be called a social being.

Thus human nature has both active and passive aspects : it is at the same time interested and passionate, and this is the kind of man presupposed by Bentham in his philosophy. Because of this nature man cannot be sufficient to himself, if he seeks his own satisfaction he must do so in his relations to some external objects. As such a man is a natural and social being, so those objects also are natural and social ; and as these are independent of him, it is not always assured to him to gain the objects necessary and satisfactory to him. This circumstance necessarily makes man interested and passionate, and it seems to be a general experience for a man to feel anxiety and distress in many cases of his life. In view of this fact we may say that man must pursue

happiness. To Bentham's, therefore, happiness is an essential object or value which man with such a nature must always pursue. In this sense, then, the idea of happiness has its necessity.

Having examined all the three points (two in the preceding study and one in this), we may conclude that Bentham's idea of happiness is adequate with regard to the social situation of his time. In a word, this idea meant happiness as a basic interest of capitalistic man who was becoming powerful in the social life of the day.

In England at that time industrial revolution was going on. The industrial people were opposed to the privileged aristocrats and in their struggle against the latter they grew into an influential class. Bentham's idea of happiness standing for the basic interest of this class had a twofold social meaning. On the one hand it is defensive-reformative; on the other hand, it is constructive-developmental. The great social significance of Bentham's utilitarianism consists in its contribution to the establishment of the capitalistic system, which was one of the greatest historical accomplishments at that time not only to the industrial class but to the world.

But there is no denying the fact that the industrial class came to be divided against itself due to the opposition of basic interests, quite contrary to Bentham's intention in those formative days of the capitalistic system. Accordingly we must say that Bentham's idea of happiness is no more adequate to our present situation in so far as its concrete contents are concerned. But 'the greatest happiness of the greatest number' is still today a valid purpose. Only we have to form a new idea of happiness with new concrete contents which are really adequate to the present. In this sense, then the spirit of Bentham's utilitarianism is still living in our heart.

* For the Japanese original of this article, see Vol. XXXVIII, No. 12, Vol. XXXIX, No. 1, & 2.